

トランスナショナルな親子関係におけるケア実践の多様性と葛藤 ーロンドン在住日本人女性の事例からー

高橋薫（昭和女子大学）

問題の背景と目的

本報告は、ロンドンに暮らす日本人女性を事例とし、トランスナショナルな親子関係におけるケア実践に着目をする。グローバル化が進み国境を越えた人の移動が加速する中、外務省の「海外在留邦人数調査統計」では、海外在住の日本人は約 130 万人にのぼり（2025）、中でも 40 歳代女性が 162,770 人と大きな割合を占めることが報告されている（2018）。一方、日本国内では高齢化が進行し、それに伴いこれら海外在住者たちは親の老化・介護問題に直面し、日英間の物理的距離による葛藤を経験していると考えられる。

日本人女性の海外移住に関する研究は、母親としての経験に焦点を当てたものが蓄積されてきたが、トランスナショナルな環境における成人した娘の経験については、未だ十分な解明がされていない。またケアについては近年、不平等な関係性や連帯・分断の多様化を考察する概念的枠組みとして活発な議論が展開されている。そこで本報告では、グローバル化により進展する人の国際移動と、日本の高齢化社会が交差する場において、海外移住した女性がトランスナショナルな家族関係の中で娘として経験する、ジェンダー化されたケア実践の多様性と、それに伴う葛藤を検討する。

調査方法

筆者の既存のネットワークを通じた調査協力への呼びかけに応じたロンドン在住の 30～50 代の日本人女性 9 名を対象に、2024 年夏に東京とロンドンで半構造化インタビューを行った。インタビューでは主に、日本で暮らす親との関係、どのようなケアを日常的に実践しているか、そこで経験する葛藤はどのようなものか、などの項目について聞き取りを行った。

結果

調査協力者全員が、日本とイギリスの物理的距離に起因する、本来自身が親に対して提供したいと望む物理的・精神的ケアを実践できないことについてのジレンマを抱えていた。しかし、その程度は兄弟・姉妹構成や親の健康状態によって異なることが判明した。物理的距離の障壁を克服する手段としては、LINE に代表される多様な ICT ツールが活用され、親子の心理的距離を縮める効果を発揮していた。また、あえて離れていることにポジティブな意味付けを与えようとする語りも見られた。一方で、社会インフラのデジタル化が進むことで、高齢の親達はしばしば従来利用していたサービスから疎外され、トランスナショナルな相互ケアの機会が制約される現状も明らかになった。報告当日は、より詳細な語りや分析内容について提示・議論したい。

文献

外務省、2018、『海外在留邦人数調査統計ー平成 30 年要約版（平成 29 年（2017 年）10 月 1 日現在）』
外務省、2025、『海外在留邦人数調査統計（令和 6 年 10 月 1 日現在）』

付記

本研究は、JSPS 科研費 24K16494（課題名：トランスナショナルな親子関係におけるケアに関する研究ー在英日本人女性の事例から）の助成を受けた研究成果の一部である。

キーワード：親子、国際移住、ケア